

# グリーン小説へのアプローチ

大 江 法 城

## I はじめに

最近、深い意味もなく遠藤周作氏の「沈黙」を読み深い感銘を受けた。キリシタン禁制の日本に渡ってきた宣教師ロドリゴが迫害の中でその使命をはたそうとするが、ついに踏絵を踏む。つまり転ぶわけである。書名がすでに暗示している通り「神の沈黙」を主題としたものだが、拷問を受け苦しんでいる人々を目前にして「何故神は沈黙したもうのだ」、「何故奇跡は起こらないのだ」というロドリゴの悲痛な呻きが聞えてくる。はたして日本というこの東洋の風土に異質のキリスト教が根をおろせるだろうか、背教の烙印を押されたこの主人公にも救いがあるのだろうか。著者は暗示するだけで多くを語らない。しかし、カトリック教徒である著者が「神を信ずること」と「神を疑うこと」のギリギリの線にまで自分を追いこむことでこの大作が生まれてきたことはたしかである。

この小説の中に Graham Greene の強い影響が認められる。日本でもグリーンは映画化された The Power and the Glory (権力と栄光) や The Third Man (第三の男) 等の原作者として、またカトリックのテーマを扱う現代英国作家の巨峰として広く知られるようになった。しかしながら、まだ彼の評価は定まっていないと見るのが正しいようである。その原因は彼のカトリックのテーマをどう受けとめるかに難解な点があるためだと思われる。ややもすると神学的解釈に終始される危険性を常にはらんでいる。東京大学で講義したこともある G.S. Fraser は1930年代のイギリス小説を次の4種類に分類している。

1. the symbolic melodrama, or literary thriller
2. “documentary” novels
3. novels of social allegory
4. novels written superficially in terms of comedy or even of farce, but with an underlying very disturbing note of bitterness

そして、グリーンはこの1に相当し映画的手法と悪の意識の取り扱いにユニークな面があるとしている。

これまでのグリーン観については賛否両論に別れるが、例えば Walter Allen はその The Novels of Graham Greene の中で、悪に対する考え方の中にアウグスチヌスの態度とペラギウスの態度の二つがあることを明らかにし、悪の必然性を謳ったアウグスチヌスの態度でグリーン作品を批評している。すなわち、グリーンの The Lawless Road (掟なき道) にも述べられているように、自分を「境を接した二つの国を行きつ戻りつする旅人」と称し、善と悪、天国と地獄とい

う二つの国の境界線上で危険にさらされる人間の姿を写しつづけたことに関連している。こういう認識そのものがグリーンのユニークな点だと述べている。勿論、この「二つの国」のうちでは悪の認識——地獄の認識——がはるかに強く、またリアルなことも付け加えている。さらにアレンはカトリック作品へのランドマークと考えられている Brighton Rock (ブライトンロック) やホーソンデン賞を与えられた「権力と栄光」に言及し、人物が大きく描かれるようになったことや、追いつ追われつの主題は初期の作品と変えることはないが、そこに描かれる登場人物に違いがあり、彼らはすべて永遠の相においてのものとなっていると指摘する。つまり、追うものと追われるものがそれぞれ全く別の価値観を持ち、信ずるものが全く別のものになっていて、この二つの世界が、相手が頻死の状態になるまでうちのめし合っているというのである。さらにアレンは Tradition and Dream, The English and American Novel from the Twenties to Our Time の中で、グリーンが4つの小説にふれて、「権力と栄光」を最高の傑作とし、神の恩寵の作用を主題にすえたこと、寓意的要素を払しょくしていることを称賛している。

英国においてより、フランスにおいてグリーンが称賛されたのは多分に François Mauriac のせいかもしれない。Victor de Pange の研究書の序文でモーリャックはグリーンが小説技法には関心のないことを述べた後、「グリーンが小説の中に私がはっきりと見出すものは恩寵である。その現実性は非現実的なところに存する。グレーム・グリーンは探偵映画と一連の暗黒小説に、世間の知らぬ真実の道を開かせたのである。(中略)グリーンは半ば崩壊したわれわれの古びた世界の中で、あの不条理と狂気を——そうしたものを通して、人間の罪の歴史に、自然の恩寵のロマネスクな戯れが示されるが——極めて特異な姿に描き出すことを創始した作家ではなかろうか。」と述べている。さらに、この5年前に「権力と栄光」のフランス語訳が出版された時、その序文では「親愛なるグレーム・グリーン」にはじまり、「あなた」と呼びかけているほどだということである。フランスではこの他、グリーンを高く評価する人々が多く、教授資格試験の対象にもされていると聞いている。しかし、文学的評価よりむしろ宗教的に云々されることが多いようである。

一方、グリーンに批判的、否定的な評価を下す人々も多い。George Orwell らの批判をまとめれば、1)プロットの進展が機械的である。2)葛藤がお定まりの方程式に従っている。3)登場人物に心理的蓋然性が全く見られない。4)過ちを犯し堕ちて行く者を重要視するところにスノビッシュネス(俗物根性)が感ぜられる。等々、相当きびしい語調のものである。グリーンが作風にデカダンスの気配を感じとった David Pryce-Jones は Elizabeth Sewell の考えに同意しながら、グリーンをカトリックとしてよりネオ・ロマンティック系の末に置いている。

グリーンはカトリック作家と称されるのを快しとしていない。日記 In Search of a Character のフットノートの中で、ただ「4、5冊の本の中にカトリックの考えを持った人物を登場させている」作家と解釈されたい旨を吐露している。しかしたとえ批判的なものもあつたにしろ、これまでのグリーンはカトリック作家として扱われ、その前提で論じられてきた。ところがプライス・ジョウンズに至ると、彼の信仰はパーソナルなものと解釈されている。これはグリーン研究の新しい視点であり、もう一度ヒューマニズムの原点に帰って論ずる方向を見出すもので、現実的

な方法であろう。

A Burnt-Out Case (燃えつきた男) を世に出した後、「もう一作全力をそそぐ小説は私の力では無理な年齢になった。」と語って注目を浴びたが、1974年 The Honorary Consul (名誉領事) という長編を発表している。私は主に初期の作品 The Man Within (内なる私) と中期の傑作「権力と栄光」およびこの「名誉領事」の三つの小説に注目して、主題とか描写技法等の推移を調べてみたいと思う。

## II コミュニケーションについて

グリーンの作品における性あるいは性行為のもつ意味について考えてみたい。

初期の代表作で、出世作ともいえる「内なる私」では、主人公 Francis Andrews は追っ手から逃れて真っ暗な森の中の一軒家にたどり着き、色の白い若い女 Elizabeth に会う。アンドルーズは酒の密輸団の首領 Carlyon とその一味に追われていたのだが、彼女が追っ手から匿ってくれた際、自分の飲み残したお茶を 'That is my cup.' と言って飲み干してくれたのに感動する。その行為は彼の心に驚くべき高潔な行為に映るのである。

Kneeling in the dark not only of the room but of his spirit he imagined that with unhesitating intimacy she had touched his lips and defend her own.

さらに友達と呼んでくれたりして彼女を神聖視しはじめる彼は、彼女の手を握りたいという思いを持つが、'more stern critic' が内部にもう一人居て果たせないのである。法廷で申し開きするよう励まされ、ルイスに赴き堂々とカーリオン達を裏切ったが、被告達は無罪放免となってしまう。その夜、首席検事の情婦 Lucy の誘惑を受け入れ、エリザベスに対するうしろめたさにためらいながらも、この女とベッドを共にする。

"Closer," she said. His fingers closed on her, pinching the flesh. He buried his mouth between her breasts. He could see nothing but he heard her laugh a little. "You cannot hurt me like that," she said ....

行為の後、アンドルーズはルーシィに 'You've made me feel myself dirtier.' とか 'I could kill myself.' といった自嘲的な言葉を投げつけている。

エリザベスのことが気がかりになって戻り、愛しているから戻ったんだと伝えて、初めて二人の唇は重ねられ幸福な夢に酔うのである。

He held her now but at a distance. "I love you, too," she said, her eyes closed and her body trembling a little. He shut his eyes so that they might be together in a darkness, which would be empty of everything but themselves. Stumbling blindly through that darkness their mouths at first lost and then found each other.

I'll ask for you only when we're married and as a favour which I don't deserve. You were right. You are holy. I don't see how I can ever touch you without soiling you a little,

but, my God.

この小説に登場する二人の女性エリザベスとルーシィはアンドルーズの世界にあっては明確に区分されている。つまり、彼にとってルーシィは肉欲の対象でしかなく、一方エリザベスは清純そのものである。いいかえれば、前者はアンドルーズの父の性格を、後者は母の性格を代表するものだ。しかし、それはそのまま、アンドルーズの分裂する二重性格を象徴する。エリザベスに対する性の潔癖さはピューリタンのというより、単に空想的だと言えるだろう。

このように、初期の作品に見られる性について一少なくとも性描写については—こだわりがあったと考えざるを得ない。よしんば、テーマの取扱い上、相反する両極に女性を位置せしめなければならなかったにしても。作者自身の認識において、まだ愛と情欲の両方の定義づけがなされていない感がする。

「権力と栄光」は正しくカトリックの主題を真正面に取り組んだ作品のせいか、性あるいは性行為の描写がきわめて少ない。主人公‘whisky priest’は追われる身で、田舎女に私生児まで産ませるなどの破戒司祭である。成長したその娘 Brigitta に会って過去を回想する場面がある。

The child stood there, watching him with acuteness and contempt. They had spent no love in her conception: just fear and despair and half a bottle of brandy and the sense of loneliness had driven him to an act which horrified him—and this scared shame-faced overpowering love was the result.

この司祭にとり、この娘の母との関係は罪でしかなく、この娘はその結果なのだ。したがって、性行為そのものは‘horrified’なものでしかない。もう一つ、性行為を描写している場面がある。禁酒国にありながら、ブランデーの壺をかくし持っているのが見つかり警察につき出され、監房に入れられた時のことである。

Suddenly, from about five feet away, there came a tiny scream—a woman's. A tired voice said, “Can't you be quiet?” Among the furtive movements came again the muffled painless cries. He realised with horror that pleasure was going on even in this crowded darkness.

先の文は完全なる独白の一部であり、この文は暗闇の中である。音と回想の中だけだというのがユニークである。破戒司祭とはいえ、その責務までは棄て去っていない主人公にとっては、性行為は大罪としてしか考えられないのである。重大な命題を中心にすえた作品ゆえに、意図してこの程度に筆をとどめたものと思われる。

The End of the Affair (情事の終り) でもそうだが、後期の作品ではこういった描写は大胆である。「名誉領事」の中には Doctor Eduardo Plarr が英国名誉領事 Charley Fortnum の若き妻 Clara との情事を楽しむシーンが何度かある。

He led her straight to his bedroom and began to undress her. A catch of her dress stuck, and she took the work out of his hands.

As he joined her he thought with relief: this is the end of my obsession, and when she cried out, he thought: I'm a free man again.

The girl caressed the inside of his thigh and ran lips down his body. He felt no more than a mild interest, a curiosity to see if she were capable of arousing him a second time.

She climbed on to his body and cried out an obscenity, taking his ear between her teeth.

これらの例で充分であろう。無関心主義者とでもいうべきこのプラーは、人を「愛する」こととか、「信ずる」ことを忘れてしまったような男で、クララはもと娼婦である。もうここでは初期のキザな態度もなく、過去の回想や暗闇の中に閉じこめられてもいない。1966年に書かれた *The Comedians* (喜劇役者) と同様に性に対するためらいから完全に解放されているせいか、登場人物の輪郭も大きく描かれている。これまで見てきたように、初期から中期にかけての作品ではグリーンのピューリタニズムがうかがえる。グリーンの作品では人物間のコミュニケーションに欠けることがよく指摘されているが、グリーンにおいては性がその媒体となっていると言えないだろうか。「内なる私」は一口に言って 'the divided mind' を取り上げたものであり、一人の人間の内奥で相反する二つの要素がぶつかり合うという、*Dr Jekyll and Mr Hyde* を連想させる「二重性格」を追求したものである。したがって、「自分は誰なのか」を自覚できないでいるし、自分に対するコミュニケーションも出来ぬ主人公なのである。ルーシィとの間では苦痛と悔恨の情しか残らなかったが、エリザベスとのプラトニックな恋により彼はそれまで自分を取り巻いていたものから自由になりえたのである、結末は悲劇的であるけれども。すなわち 'more stern critic' が 'sentimental, bullying, desiring child' に勝ちをおさめた結果、かなり自分を取り戻すのである。ブライトンロックのピンキーは童貞であり、そのことを自分のプライドを守る武器と考える為、ローズを愛することに苦痛を感じている。しかし、ローズの超自然的な一超地上的とも言える一愛を仲介にしているゆえに、神の恵みが働きうる余地を残しているといえよう。「名誉領事」に至っては、もうこれまでのような情事即破滅といったかたくなな鉄則は崩れ去っているといえる。サディズムの傾向は払しょくされてはいないが、プラーは自信に満ちてクララと情を交している。そこには不安もまごつきも肉体蔑視も見られず、むしろ賛美していると言った方が良好だろう。また、*The Quiet American* (おとなしいアメリカ人) 以後からだと推測するのだが、優しいこまやかな愛情表現がそこそこに見られさえするようになった。このようにグリーンの人物達は罪の意識とノイローゼに悩むが、その疎外化のどん底では性行為は重要な意味を持っている。つまり、自己伝達、あるいは人物間のわずかなコミュニケーションとして精神的な役割を持ち、コミュニケーションを目ざす一つの行為として利用され成功している。

### III 文体について

作家は読者を出来るだけ早く自分の世界に引き入れるため、書き出しの部分に意欲を燃すもの

だと聞いたことがある。この意味から、書き出しの部分を比較するのも意義があろう。

He came over the top of the down as the last light failed and could almost have cried with relief at sight of the wood below. He longed to fling himself down on the short stubbly grass and stare at it, the dark comforting shadow which he had hardly hoped to see.

As though the wood were a door swinging on a great hinge, a shadow moved up towards him and the grass under his feet changed from gold to green, to purple and last to a dull grey. Then night came.

この「内なる私」の書き出しは、特に取り上げるべきものではないかも知れないが、夕闇と足下の草原の色の变化等には非常に絵画的な描写がある。この作品の改訂版には作者のノートが寄せられているが、それによれば、ストーリーは依然として‘embarrassingly romantic’であり、文体は相変わらず‘derivative’で、唯一のものといえばその‘youth’だけだと述べている。さらに1971年に出版された半自叙伝ともいえるべき A Sort of Life には Stamboul Train (スタンブール特急) が大衆的成功をおさめた30才頃迄の回想が客観的に述べられている。その中で「内なる私」について、次のように伝えている。

The Man Within is very young and very sentimental. It has no meaning for me today and I can see no reason for its success. It is like the book of a complete stranger, of a kind for which I have never much cared.

作者が自分の作品について語ったものが最高の批評などとは考えられないが、この指摘については実に適確だと言えよう。さらに続けて、‘sentimentality’とか‘over-writing’とかのあらゆる欠点にもかかわらず‘professional’だったとしている。この自負の背景には‘I had been determined not to write the typical autobiographical novels of a beginner.’という意気込みがあったためだろう。最近の小説家の処女作には自伝風のものが多いことを考えると、この歴史小説は貴重で‘serious’な作品と言えるし、ロマンティックだとか観念的だと言われるにしろ、生きることや行動することの重大さが常に念頭におかれて書かれたものと思われる。それに、鋭い倫理感覚が基礎に置かれていると見るべきである。この他、この作品は後の作品に見られるテーマが萌芽の状態で見受けられると言われるが、後の映画的手法の萌芽が見られるのも興味深い。

「権力と栄光」の書き出しは、グリーン作品の中でも最も優れたものである。引用が長くなるが書き出してみたい。

Mr. Tench went out to look for his ether cylinder, into the blazing Mexican sun and the bleaching dust. A few vultures looked down from the roof with shabby indifference: he wasn't carrion yet. A faint feeling of rebellion stirred in Mr. Tench's heart, and he wrenched up a piece of the road with splintering finger-nails and tossed it feebly towards them. One rose and flapped across the town: over the tiny plaza over the bust of an ex-president, ex-general, ex-human being, over the two stalls which sold mineral water, to-

wards the river and the sea. It wouldn't find anything there: the sharks looked after the carrion on that side. Mr. Tench went on across the plaza.

現代作家には represented speech は珍しいことではないが、グリーンのそれは特にユニークで目を見張るものがある。このパラグラフでも先ず、禿鷹なぞに 'shabby' な感情がある筈もないが、「俺の死を待ってやがるな、いまいまいし！」と言ったテンチの気持ちを裏返しに反映させている。この気持は 'he wasn't carrion yet.' と日常会話的な表現を取っていることで尚更強められている。そしてその「いまいまいし」は「指の爪を裂きそうにしながら土をつかんで禿鷹に投げつけた」というテンチの反抗のアクションとして表現される。'It wouldn't find anything there: the sharks looked after the carrion on that side.' の文なども、一見しただけでは無造作だが、「そちらへ行っても何も見つかりはしないだろう、鯨がとっくに腐肉をあさっていたのだから」の意味の裏に「ざまあみろ」という気持が秘められている。そして、'Mr. Tench went on across the plaza.' という簡潔な文でこのパラグラフが終るわけだが、ここでも読者は意気揚々としたテンチの後姿を想像するのである。

このパラグラフの中央部を占める文も注目に値する。禿鷹の一羽が「飛び立って、パタパタと町を横切り、小さな広場や前大統領、前将軍、故人達の胸像や、ミネラル・ウォーターを売る二軒の店などの上を飛んで、河と海の方へ飛んで行った。」の部分には映画的な手法、特にカメラワークの技術がうかがえないだろうか。カメラを操作する音さえ聞こえてくるようだ。グリーンは the point of view の重要性を Percy Lubbock の The Craft of Fiction から学んだことを「これもまた人生」で明らかにしている。カメラワークの操作は精巧かつ的確なもので、日常的な出来事もその巧妙さによって芸術性の高いものとなっている。その際の判断の基準となっているのが「視点」である。他の作家に見られるような作者自身の視点のみという単純なものでなく、各登場人物の視点からプロットをつないで行くというものである。更に後期の作品へと移る毎に、カメラワークに倫理性が帯びてきているということである。単なる機械的作業から完全に脱脚できたわけである。

カメラワークの導入と同じ程、この作品でもきびきびした文体で成功している。物理的な動きをいかして読者に伝えるかについて、グリーンは「これもまた人生」で次のように語っている。

Excitement is simple: excitement is a situation, a single event. It mustn't be wrapped up in thoughts, similes, metaphors. A simile is a form of reflection, but excitement is of the moment when there is no time to reflect. Action can only be expressed by a subject, a verb and an object, perhaps a rhythm—little else. Even an adjective slows the pace or tranquillizes the nerve. I should have turned to Stevenson to learn my lesson.

こうして彼はスリラー形式の小説は詩と違って、言葉ではなく動き、アクション、性格で出来るものであることを発見し、それを用いて見事に独自の文体を確立したと見て良いだろう。

次に「名誉領事」の書き出しに注目してみよう。

Doctor Eduardo Plarr stood in the small port on the Paraná, among the rails and yellow

cranes, watching where a horizontal plume of smoke stretched over the Chaco. It lay between the red bars of sunset like a stripe on a national flag. Doctor Plarr found himself alone at that hour except for the one sailor who was on guard outside the maritime building. It was an evening which, by some mysterious combination of failing light and the smell of an unrecognized plant, brings back to some men the sense of childhood and of future hope and to others the sense of something which has been lost and nearly forgotten.

ここには「権力と栄光」とか England Made Me (英国我を作りき) のように represented speech もなければ、独得の簡潔な文体も影をひそめている。「内なる私」と同じく夕暮時の描写である。初期の頃には文頭から緊張がみなぎり、人物が強迫観念におそわれていたものだが、ここには見えない。中期の作品の様な特別の意気込みもなく、淡々とした調子で描かれている。だが単なる夕暮ではなく、絵画的な美しさの中に、グリーンが蓄積されたビジョンがうかがえる夕暮である。「ある者には幼年時代の意識と未来への希望を、またある者には既に失われ、ほとんど忘れられたものへの意識をよびさましてくれる」夕暮時である。‘the sense of childhood’ にふれていることに象徴されるように、あの懐しいグリーンランドの展開である。

この小説では文体のユニークさは見られず、むしろ落ちつきのあるゆったりしたものとなっている。円熟そのものだが、以前の作品のきびきびした持味が失われているのは寂しいかぎりである。例えば、プラーが旧友 Father Rivas と誘拐された名誉領事フォートナムの両方を救おうとして、死を覚悟の上で使節となるどころなどにも、もう迫力感はない。この作品では描写の技法よりもむしろ、新しい神学的試みを意図したものと考えるべきであろう。

#### IV 主題について

グリーン作品は多義的である為に失敗していると非難されることがあるが、幾分、的を得ているといえる。裏切り、追跡、愛と情欲、愛とあわれみ、善と悪、神と悪魔、瀆聖等々、みな繰り返しグリーンランドのテーマとされ、複合的な組み合わせのためより複雑になっている。

一貫した主題は何か。そしてそれらは時代を経て、どの様に変化しているかを、皮相的になるかも知れないがここで考えてみたいと思う。

昔より追跡劇は他の作家もスリラーとして生んできているが、グリーンは Francis Tomson の The Hound of Heaven の影響を受けてから、「追うもの」より「追われるもの」に光をあててきた。「内なる私」でも Carlyon に追われるアンドルーズが主人公だし、「権力と栄光」でも共産権力から追われるのんだくれ司祭が主人公である。「名誉領事」では主人公に匹敵するわき役プラーは現代の不条理に追われている。しかし、その中味は相当変化していることに注目したい。追われる原因を考えてみると、初期の作品には裏切りが多いことがわかる。アンドルーズはカーリオンと恋人エリザベスを裏切ったことでストーリーは展開されて行くのだし、It's Battlefield (ここは戦場だ) では登場人物の殆んどが裏切りに加担する程拡大されているそうである。「英国我を作りき」では国際金融を舞台にさまざまな視点で裏切りが扱われている。Conrad Drover にしても Anthony



にしても、それらが全部差こそあれ、悲しむべき過去を持つ精神分裂症で、裏切る相手はいつも最愛の人である。不幸な幼年時代が未来に重大な影響をおよぼすというのはグリーン一流の考え方であり、最愛の人を殺す結果になるのはワイルドの影響だろうか。結末は自殺、轢死そして溺死と全て悲劇的である。

中期のカトリック小説と呼ばれる作品においても、「追われる」存在にスポットをあてるやり方は変ってはいない。しかしながら、ランドマークとされる「ブライトンロック」からは「追うもの」の正体はかなり象徴的である。初期はむしろ、個人的要因で追われる訳だが、ここでは外見上の奥にもう一人いるように思われてならない。例えば、「権力と栄光」の司祭は国家権力に追われているが、実は「神の手」から追われているのではないだろうか。ここでは主人公達は単なる無法者ではなく、神の前での罪人であり、主題も永遠性を帯びてきている。神が追い求めるのは人間の魂そのものであるから、自然的なこの世も人間の行為も普遍的なものに質的变化を遂げて行く。地獄の存在を信じ、墮地獄の罪人の自覚を持つピンキーと、破戒にも拘らず司祭職を忠実につとめようとする司祭と、「あわれみ」をかけるがゆえに罪をおかして行く The Heart of the Matter (事件の核心) のスコウビー等を通じて、グリーンは「神と人間とのあるべき関係」を追い求めているようだ。悪のかぎりをつくすピンキーにも、ローズが彼の子供をみごもったということは、永遠の生を象徴しているものだろうから、神の救済の余地は残されていると見るべきである。あの破戒司祭も殉教者として神の手に捉えられたと考えられよう。何故ならこの銃殺はある少年を感動させ、あらたな司祭の登場を歓迎している。これは一種の奇跡であり、彼の死が無駄ではなかったことを暗示するものである。同情心が強い性格から立場が苦しくなり、カトリックでは墮地獄の罪とされる自殺をしてしまったスコウビーも、この作品の末尾ではある神父に 'from what I saw him, that he really loved God' と理解され、裏切られた妻ルィーズも 'He certainly loved no one else.' と自からを慰めている下りを見ると、やはり神の手に捉えられたと考えられる。

「名誉領事」になると「追うものと追われるもの」とか、「神の恩寵」といったものがやや影が薄らぎ、大胆な神学的解析を吐露しているところにその特徴がある。誘拐団のリーダーであるリヴァスは 'Father' と呼ばれる男だが、型破りな神の観念を披露する。彼によれば、「キリストは人間であつたし、彼が人殺しをすることになれば、それは神のあやまちでもあり、神をあわれむことになる。神の善とともに、神の悪をも信ずる。神は 'His image' として人間を創ったのだから、我々の悪は神の悪でもあり、'a day side' とともに 'a night side' がある。そして、神は我々と同じ 'evolution' に悩んでいる筈である。神の進化は我々の進化に依存しているので、我々の悪の行為は 'His night side' を強化し、善の行為は 'His day side' を援助することになる。我々は神のものであり、神はまた我々のものである」というものだ。勿論、これはリヴァスの視点からの所信であって、グリーンのものであることはできない。ただ、この観念に共感していることは事実である。神の中に不条理と進化を認め、神と人間とのあるべき関係によって地上に理想の世界が実現され、この世の終末とともに真のキリスト再臨があるというものである。私はグ

リーンがカトリック教徒として正統か異端かという問いには関心がない。ただ、中期の作品では、余りにもカトリックにテーマを求めすぎ、自からの信仰を問いすぎたきらいがある。プライスジョウonzの指摘が正に的中した感があるとしても、ヒューマニズム神学への道を辿ることで、現代の不条理を断つ方向を模索しているのではないだろうか。

神の観念とは別に、不条理な人間存在を示す為に、‘Machismo’の観念が表わされている。「男の名誉」とでも訳すべきものだろうが、無関心主義者プラーでさえ、この善とも悪ともつかぬものに踊らされるのである。これは登場人物の行為の源泉となっているもので、グリーンランドには初めて見られ、今後どういように変質して行くのか興味深い。

## V おわりに

本論ではグリーンランドに見られるコミュニケーションと文体、そして主題等を大雑把に見てきたわけである。

性および性行為の描写の中にも、善悪両極に区別するマニ教的な姿勢は薄れ、文体ではカメラワークとスティブソンなみの方法でこの世界に貢献し、護教的とも非難されたカトリシズムもヒューマニズム神学へと展開した。

主題のみに限って考察するなら、たしかに過去の作品からのむしかえしばかりである。しかし、不条理な現代では罪を通じてのみ神と係りあうというテーマこそ永遠のものであり、むしろ新しいものばかり追い求める現代人の方にこそ問題がありはしないだろうか。不滅のテーマを追い求めることこそ、T.S.エリオット以来の伝統を守るグリーンの面目躍如たるものがあるのである。

破戒司祭には瀆聖を許し、スコウビーには自殺を許し、「おとなしいアメリカ人」では Fowler に殺人幫助までさせ、リヴァスの異端的カトリシズムに共感までしたグリーンの旅はどこまで続くのであろうか。Marjorie Bowen の *The Viper of Milan* (ミラノの蝮) に触発されて作家を志した彼の道は正に「旅」と言って良いだろう。この旅人の全体像を把握することは可能であろうか。先にも述べたが、彼に対する批評は全くの賛否二通りである。しかし、このことの中にこそ真実がある。ファウストの中の言葉を借りるなら、「多く誉められもし、多く毀られもせしヘレナ」である。

真にグリーンの全体像に肉迫するには、一つの確かな視点が必要であろう。つまり、超自然的な世界を認める側に立たねばならないということである。何故なら、彼の作品は神との係りにおいて創作されたものだからである。但し、伝統的神学の枠組で捉えられるべきでもない。小説家グリーンは、より普遍的なビジョンを追い求めているのであって、カトリックの護教作家では決してないのである。

もう一つは、総合的、総体的なアプローチが必要である。この点では、大いに参考にしたクンケル等の批評、野口啓祐氏編訳：「グレアム・グリーン研究」のような方向が望まれるのではないだろうか。

「事件の核心」の扉に Péguy の言葉が引用されている。

Le pécheur est au coeur même de chrétienté . . . . . Nul n'est aussi compétent que le pécheur en matière de chrétienté. Nul, si ce n'est le saint.

「罪人はキリスト教の精髓そのものの中にいる。だれも罪人ほど、教えについて有能なるものはいない。聖人をのぞいては。」

グリーンは何よりも現代における神の不在を訴えてきた。が、その「悪の認識」や「罪の意識」に触れる毎に、全く個人的なことであるが、私は法然から親鸞への日本浄土教の伝統を思い起こさずにはおれなかったことを付記しておきたい。

#### 参 考 文 献

- G.Graham : The Man Within, Heinemann 1962  
G.Graham : The Power and the Glory, Heinemann 1962  
G.Graham : The Honorary Consul, Pocket Books 1974  
G.Graham : The Heart of the Matter, Heinemann & Bodly Head 1971  
G.Graham : A Sort of Life, Penguin Books 1974  
G.Graham : The Quiet American, Penguin Books 1974  
G.Graham : Brighton Rock, Penguin Books 1957  
G.Graham : A Burnt-Out Case, Penguin Books 1963  
D.Pryce-Jones : Graham Greene, Oliver and Boyd 1963  
G.S.Fraser : The Modern Writer and His World, 研究社 1963  
F.ウイングム(宮下忠二訳) : Greene, 研究社 1971  
前川祐一訳 : 失われた幼年時代, 南雲堂 1963  
野口啓祐編訳 : グレアム・グリーン研究 I, II, 南窓社 1974  
ヴィクトル・ド・パンジュ(窪田啓作・般弥訳) : グレアム・グリーン, 河出新書 1956